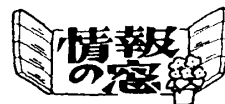


きがあったわけである。研究発表会とは全く別の活動であったにもかかわらず、本来の発表会よりも大勢の人が集まり、研究発表会が終了してからもさらに1時間も議論が続き、外は冷たい雨の中、この部屋だけは熱気にあふれ、窓には白い露がついていた。そして当然のなりゆきとして懇親会も行われたようである。

世間で早稲田を形容する言葉には「進取の精神」

「在野精神」「反骨精神」「学の独立」などがよく知られている。今回の研究発表会にはそのような精神が感じられ、ニッポン再生とまでいくかどうかはわからないが、少なくとも学会再生には確かな手応えを感じた。最後に、素晴らしい研究発表会の場を盛り上げていただいた実行委員会のみなさまに、紙面を借りて感謝申し上げます。

第13回企業事例交流会ルポ



堀切 直美 (株)構造計画研究所)

去る2004年3月17日、日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会初日午後、第13回企業事例交流会が開催され、30~40名の聴講者が集い、会場は熱気に包まれていた。

企業事例交流会の特長は、企業の実務家にOR手法を用いたプロジェクトを紹介していただく点である。発表後には、コメンテータによる解説、全聴講者との質疑応答が行われ、発表者、コメンテータ、聴講者から忌憚のない意見が飛び交い、ORをキーワードに、研究者と実務家をブリッジするに相応しい会である。

企業事例(1)セッションでは、相澤りえ子氏(構造計画研究所)を座長として、2件の発表が行われた。はじめに、山中啓之氏(NTTデータ)による、「データマイニングを用いたIDSログ情報のネットワーク監視業務への活用」と題した発表では、コンピュータへの不正アクセスを検知するIDS(侵入検知システム)より出力されるログデータを、統計手法、およびデータマイニング手法を用いることで、システム状態の把握をより迅速、簡単に行うことのできるフレームワークを提唱するプロジェクトが紹介された。この背景には、肉体的、精神的に負荷が大きくかかる管理者を補助するためのフレームワークとなれば、との目的があった。コメンテータの杉野隆氏(国士舘大学)からは、(1)IDSに対する関心度が高いとは言えない。関心を持つのはセキュリティに対して先進的なユーザーに限られている。(2)攻撃者の動きを全て自動的に判断することは不可能だが、管理者の負担を和らげるしきい値を設定できるのならば非常に効果が高い。(3)攻撃パターンの学習法が判明すると有益な情報となる、な



会場風景

どの情報セキュリティ分野における諸問題と、今後の展望に関してコメントがあった。なお、杉野氏からセキュリティのパフォーマンスに関する質問があり、データの検証は行ったが、実践に移すのはこれからである。また、聴講者からの、攻撃者のモデルと実際の損害を対応付けられればより効果的ではないか、との質問に対し、実損を調査しているグループとのコラボレーションを検討する必要がある、との回答があった。

続いて、松村みか氏(コーエイ総合研究所)による、「AHPを利用したマレーシア農村開発プロジェクトの参加型意思決定」と題した発表が行われた。

松村氏は、マレーシアのサバ州において、農村在住の女性の地位を向上させるための計画に対する調査に関して、AHPを用いたパイロット・プロジェクトの評価事例を紹介された。併せて、調査団による現地での活動内容も報告された。なお、選定方法として、現地での参加型手法による採点がキーとなった。AHP、およびANPの普及、発展に尽力されてきたコメンテ

ータの八巻直一氏（静岡大学）は、AHPが普及し、このような事例が発表されることを喜ばれた上で、絶対評価法で評価をする際の、点数の平均化を注目されていた。また、会場では大規模な計画、選定にAHPを使う事の是非、気をつけるべき点についての意見のやり取りや、評価基準の入れ替え回数が少ないのではないかと、個人がばらばらに評価をした結果をまとめた際に点数が平均化されてしまう原因は、極論が多いため平均化したのか、評価者が平均的回答を出したのかに留意する必要がある、など非常に活発な質疑応答があった。

休憩を挟んで、西川武一郎氏（東芝）を座長として、企業事例(2)セッションで2件の発表が行われた。成松克己氏（東芝）による、「自立分散サプライチェーンプランニングの提案」と題した発表では、現在のサプライチェーンプランニング（SCP）は一元管理を主軸に行われているため、柔軟性に欠けるとの指摘をされた上で、余力情報を用いた自立分散型のSCPシステムの開発プロジェクトに関して解説された。コメントータの黒田充氏（青山学院大学）は、(1)サプライチェーンは元々自律分散型の管理が目的であること、(2)一元管理の手法を用いている企業が大多数であること、(3)余力情報を用いるメリットは、「上流工程から下流工程への流れを円滑にする」、「顧客の要望に答えることができる」、「社内でSCMを実践する」などであるとまとめられた。会場での質疑応答では、事前に指示量を配分しないのであれば、解析に時間がかかるのではという質問に対し、ケース・スタディでは1週間分の解析を1日で行うことができたが、これをリアルタ

イムで行うことは難しいとの回答があった。また、サプライチェーンはハブレスであり、部門ごとが主体となるとのコメントが加えられた。

続いて、当交流会最後となる、佐藤敏彦氏（日立金属）による「変動特性把握と適応生産管理」と題した発表では、APS（Advanced Planning and Scheduling）導入により、生産リードタイムの減少、納期遵守率の上昇を実現できたことを報告された上で、始めにABC分類の代わりに、「時間」の評価を付加するためにRFM分析の手法を行い、パレート図で品目ごとの特性を分類し、ここから、業態、商品の違いにより適応性の高い生産管理方式を決定したとの説明があった。コメントータの大野勝久氏（名古屋工業大学）からは、(1)生産順序は？(2)分析を行ったモデルでは、現場の管理体制や、設備の能率に修正を加えたか、との質問があり、これには(1)フローショップ型(2)していない、という回答であった。また、会場での質疑応答の中で、タイムバケットが大きい場合は生産順序を考える必要性も出てくるとのコメントがあった。

質疑応答まで含め、全ての発表が時間を少々オーバーしての終了となった。これは発表時間枠が短いこともあるが、何よりも、会場全体に活気が溢れていたことの証拠であろう。企業に籍を置く者として、かつ、OR研究者の端くれでもある身として、業務の中でORの手法を実践し、成果をあげられた諸氏に敬意をはらいたい。そして、ORの発展に日夜励まれている実務者や研究者の皆様と触れ合う機会が今後ますます増えることを願いつつ、会場を後にした。